



アジアの星・宇宙の神話伝説プロジェクト 国際ワークショップ開催

吉田 二 美

〈国立天文台・国際連携室 〒181-8588 東京都三鷹市大沢 2-21-1〉

e-mail: fumi.yoshida@nao.ac.jp



「アジアの星」ワークショップ LOC

はじめに

現在日本の学校やプラネタリウムで語られる星や星座の物語はギリシャ・ローマ神話に端を発する物語ばかりです。これは日本だけでなく、アジア諸国でも同じ状況です。しかし七夕伝説や北極星の物語に代表されるように、アジアにも豊かな星物語が伝えられています。ある地方で発生した一つの物語が周辺に伝わり、気候風土、宗教、語り部たちの表現力によって変化し、さらに生き生きとした色彩を帯びているものもあります。

本プロジェクト（略称「アジアの星」）は、世界天文年を機にアジア地域で協力し、アジアに伝わる星の神話・伝説を収集し、民俗学的見地も踏まえてまとめ、美しい本として各国で同時出版します。さらにプラネタリウム番組や学校教育に活かすなど、アジアの豊かな星文化を広め共有することを目指しています。

国際ワークショップの開催

「アジアの星ワーキンググループ」（代表：海部宣男、幹事：矢治健太郎、嘉数次人）は、5月11-13日に各アジアの国/地域を代表する星の神話・伝説の収集者たちを国立天文台・三鷹に招待し、アジアの星の神話・伝説を収集するための国際

ワークショップを開催しました（ワークショップ幹事：吉田二美）。バングラデシュ、インド、インドネシア、香港、日本、韓国、ネパール、マレーシア、モンゴル、タイ、ベトナムの11の国/地域の代表者ら50名（海外19名、日本31名）が参加しました。中国、台湾の代表者は残念ながら出席できませんでしたが、星物語を送っていただき、日本の代表者が代理で紹介しました。また、ポリネシアに伝わる伝説も、南山大学の後藤明先生から紹介していただきました。ポリネシアには、海でつながるアジアの島々と共通の伝説でつながっています。

国際ワークショップでは約50もの星・天体・宇宙にまつわる神話・伝説が口頭およびポスターで報告されました。また、集められた神話・伝説を本にするための準備として、各国/地域のメンバー一人ずつからなる国際編集委員会が組織されました（委員長：海部宣男）。ワークショップの参加者はレセプション時には本プロジェクトと同じく世界天文年の企画である「君もガリレオ望遠鏡」の工作に興じました。また国立天文台の4D2Uシアターも見学し、最新科学が語る宇宙や星の物語も楽しみました。

アジアの星物語

このワークショップで各国/地域から集められたアジアの星物語の一部を簡単に紹介しましょう。

まず日本を代表する物語として紹介されたのは、次の四つです。

「**サマエンの星**」: 半神のサマエン（「シャーマン」と同義ではないかといわれる）が悪い熊をどこまでも追いかける話で、とうとう空まで追いかけて行って、自分自身が星（北斗七星）になったというアイヌに伝わる物語。

「**七夕伝説と瓜畑**」: 若者が天の羽衣を隠したのでしかたなく結婚した織姫は、後に天が懐かしくなって戻ってしまいます。若者と二人の子供は織姫を追って天に行き、天帝に会って瓜をわたされますが、若者が瓜を切った瞬間に水があふれ出て天の川になり、若者と二人の子供と織姫を永遠に隔てます。天帝は少しかわいそうになり、年に一度、七月七日の夜に家族が再会するのを許したという物語。

（七夕伝説は中国起源ですが、韓国やベトナムにもあります。「牽牛と織女が年に一度、七月七日の夜に会う」という点は共通ですが、地域の気候風土や風習等の影響でさまざまな変容が見られます。）

「**トクゾウと北極星**」: 難波の伝説的な名船頭トクゾウは動かない北極星を北の目印にしましたが、その妻が、家で夜中に針仕事の最中に、窓の棧の間からトクゾウが航海の頼りにしている北極星がわずかに動くことを発見してトクゾウに報告したというお話。

「**むりかぶしゆんた**」: 天の神様が南の七つ星に「この国を治めなさい」と命じたが、南の七つ星は断った。次に北の七つ星に同じことを命じたが、北の七つ星も断った。ところが小さな「むりかぶし」（すばる、プレアデス星団）が、「私がやってみます」と言ったので天の神様は喜び、その後は「むりかぶし」が天の一番高いところを種

をまく時期や収穫の時期を村人に教えたという、沖縄の八重山諸島に伝わるお話。

以上は、日本の「アジアの星」ワーキンググループに参加する天文、社会教育、出版関係などの約40名のメンバーが会合を重ねて、数ある伝説の中から選りすぐったものです。

アジアの国/地域から寄せられた星物語は、各国/地域独自のものもあれば、いくつかの国/地域に共通しているものもあります。例えばドゥルヴァ（Dhruva）という若者が北極星になったという話は、バングラディッシュ、インド、ネパールに伝わっています。

「**Dhruva** は王様の息子ですが、王様に嫌われていました。ある時彼は玉座で遊んでいるのを継母にとがめられ、「そこから降りて出て行きなさい!」と宮殿からつまみ出されました。Dhruva は実母の制止を振切って森へ行き、ヴィシュヌ神に祈りを捧げるために瞑想しました。どんな困難にあっても彼の瞑想は破れません。ヴィシュヌ神は喜んで Dhruva の願いをかなえてやろうと言いました。Dhruva の願いは「誰も彼に動けとは言わない場所に行きたい」というものでした。ヴィシュヌ神は Dhruva の願望を聞き入れ、「おまえのいる場所から太陽、惑星、および他のすべての星を統治するようになるだろう」と言いました。Dhruva は彼の父親の王国に戻って王様になり、死後、ヴィシュヌ神が彼に約束した場所、すなわち「北極星」として宇宙の不動の中心になりました。」

この物語は語り口は各国・地域によって多少異なりますが、登場人物の名前や話の骨格が共通しているため、インドからヒンドゥー文化とともに伝わったものと思われる。

昔は太陽がたくさんあったという話は中国（香港）、台湾の先住民族、インドネシアのメンタワイ島などに広く伝わっています。

中国（香港）の物語: 「昔は10匹の火の鳥（太陽）が一羽ずつ順番に空を回っていましたが、あ



ポスターの前で集合写真。

る時 10羽が一斉に飛び立ってしまい、大変暑くなりました。そこで弓矢の名人^{びい}Houyi が9羽を打ち落とし、現在は空に一つの太陽が残っているのです。」

台湾の物語:「昔は二つの太陽があり、一つが沈むともう一つが昇るのでずっと昼間でした。水は乾き、植物は育ちませんでした。そこで3人の若者が太陽を射落とそうと3世代かけて太陽が昇る場所へ行き、太陽の一つを弓で射ました。太陽から流れ出た血は若者たちを殺し、空に飛び散って星を作りました。血が流れ出た太陽は白くなって、現在の月になりました。」

メンタワイ島の物語:「昔は太陽が今よりずっと暑くて、人々は夜にならないと屋外での仕事ができませんでした。そこで月が人々のために太陽をだまして午後涼しくなるように画策しました。太陽はだまされたことに激怒し、月を刀で攻撃しました。月もまた大きな刀で応酬しました。人々は月に加勢し、太陽はついに退き、世界はそれ以来涼しくなりました。」

これらの言い伝えはきっと、暑さに悩む暑い国特有のものではないでしょうか。

出版する本のイメージ

アジアの星物語は2冊の本にまとめられる予定です。上巻は各国/地域の神話・伝説の集大成で、

プロジェクトに参加している各国/地域からそれぞれ2-4の神話・伝説を選定し、各地域の伝統文化を反映させた美しい絵とともに紹介します。下巻はアジアの星文化の解説で、太陽、月、金星、さまざまな星などの天体別の名称やその由来、それにまつわる短い言い伝えや、各地域の星祭、古代中国やインドの星座・宇宙の体系などをまとめます。

今年6月までに各国・地域での選定を行い、7月には編集委員会で上巻と下巻に掲載する内容をほぼ決定し、まず基本となる共同企画本(英語版)を作ります。11月からはアジアの各国/地域語への翻訳と出版のための準備が始まります。日本語の本は2010年に出版の予定です。大人も子供も楽しめる美しい本になるよう計画していますので、どうぞ楽しみにしてください。

「アジアの星」ワークショップ LOC

[海部宣男(放送大学), 吉田二美(国立天文台), 嘉数次人(大阪市立科学館), 矢治健太郎(立教大学), 北尾浩一(星の伝承研究室), 日下部展彦(国立天文台), 川越至桜(国立天文台), ラムゼイ・ランドック(東北大学), 匠あさみ(放送大学)]